
狐の旅館、奉公記

雪乃丞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狐の旅館、奉公記

【Zコード】

Z1399

【作者名】

雪乃丞

【あらすじ】

高校を中退してしまった少女は母親に紹介された旅館に住み込んで働くことになる。

しかしその場所に行けば、荒れ放題のボロ屋敷。

本当に此処が旅館なの！？

見た目はボロ屋敷、しかしその実態は妖怪に神様、魔法使いなどなどが泊まりに入る狐が経営する巨大な旅館！

従業員もほぼ全員妖怪、常識が通用しない場所で少女は今日も働く！！

プロローグ、見た目ボロ屋敷

少女は一人佇んでいた。

むしろ、呆けていた。

なんてボロい。

なんてボロいのだろう。

何処からどう見てもボロ屋敷だ。
三百六十度、どう見てもボロだ。

そう、誰かが居る気配が一切無いボロ屋敷。
元は厚かつただう門。

白かつただう、今は壊れている塀。
立派だつただう、玄関。
草が伸び放題の庭。

周囲も木々が伸び放題。

何もかもがボロだつた。

捨てられて何年、むしろ何十年も経つていてる。

「でも、此処・・・・・だよね」

少女は手にした白い紙を見る。

そこにボールペンで書かれたのは住所、そして『空澄館』といつ名前。

門に申し訳程度で飾られた名札には『空澄館』。

タクシーで来た。 運転手は熟練、っぽい人。
住所は間違いなく此処だ、とやや無愛想に言った。

だがどう見てもボロ。

周囲に人の家など無い。

何故なら、此処はギリギリ道が整備された山奥。

人が居るはずもない。

しかし住所は此処。『空澄館』と、ちゃんと書かれている。
なのに、おかしい。

「引越しやったのかな」

これを書いた母親はこの住所だと断言した。
でも誰も居ない。

居るなら、それこそ幽霊とか。

「・・・・・どうしよう」

今から街に引き返そつか。

でも此処まで三十分もかかつた、しかもタクシーで。
もうすぐ夕陽も沈む時間なのに、今から引き返しては絶対に夜も更
ける。

しかも季節は春。 クマでも出そうだ。

「どうしよう」

トランク片手に、少女は途方に暮れていた。

このままでは本当に日が暮れる。

ヤバイ、相當にヤバイ。

内心焦りつつも少女は視線を名札と紙を往復させる。

「どうしようも無い。」

ああ、私のまま餓死しちゃうんだ。

見つかる田舎。

そして遺品。

傍にあったダイニングメッセージージ、それは『お母さんのバカ』。

テレビに我が家が映る。

モザイクがかかりつつも母親は言つのだ、『私があの子に正しい住所を教えていれば』と。

なんて、考へてる場合じゃないんだよバカッ！－！

いつもの妄想癖、正しくは空想癖に思考が行くので頭を振つて否定する。

このままでは冗談じゃなく餓死する。

そんなのは嫌だ。

クマに襲われるのも嫌だ。

ついでに幽霊も嫌だ。

「あ

ふ」と思い出す。

先日買い換えたばかりのアレがあつたじゃないか。

「ふ、ふふ

嬉しさに怪しげな笑み。

トランクからピンクの色をしたそれを取り出す。

「けえーいたあーいでえーんわー、ぱつぱらぱー」

高く掲げる携帯電話。

ストラップは黄色い鼠のキャラクター。

一人で変な事を言つてゐるが、誰も見ていないので良い。

文明の利器利器つ。

「ふん、ふふん、ふんつ」

嬉しそうに鼻歌。

作詞作曲全て自分。

詩なんて無い。

携帯電話を開けば、明るい画面。

現在午後六時前。

画面上には、『圈外』という残酷な文字。

・・・・・あ。

天国から地獄に叩き落とされたかのようだ。

バカ、バカ、宣伝ミスじゃないの何が『山でも使える、遭難しても大丈夫!』なんだよバカ。

なんだかもう死ねる気がする。

少女はがっくりと肩を降ろした。

「ふうん、それが『けいたいでんわ』なんだ」

「うん、最新式・・・・・・・・」

ふうう、と溜息。

「じゃあ、そのぶら下がってる鼠は？ 妖怪？」

「違うもん、これは子供にも大人気ピ力
はてなと氣付いた。」

あれ、今私誰かと会話を！

声は後ろからした。

なので勢いよく振り向いてみれば、そこには人が居た。

何処からどうみても、人。

ただし外国人のような綺麗な銀髪の、とても綺麗な女人が立派な
浴衣のような柄の着物を着て立っている。
いつの間に現れたのかとかそんなのどうだつていい。
人だ。

しかも生きている。

幽靈じやない、氣のせいなんかじやない。

ちゃんと田の前に立つていて。

「あ、あああああのッ！！」

声が上するがそんなのどうだつていい。

「ち、近くの人デスカッ！！」

「近く。 そう、すぐ近くに住んでるよ
女人は態度を崩さない。
柔軟な笑顔で答える。

「えっと、あの、私、母に紹介してもらつたのですけどッ！ 誰も

居なくて！

その、『空澄館』つてこの近くにありますか！？

「あるでしょ？」

そう言うと女の人は、少女、正しくはその後方を指差す。

「え、でもこれ…………」

そちらにはボロ屋敷。

人が住んでいる様子は無い。

「…………あの、バカにします？」

「してないけど？」

普通に言われた。

少女は背中に何か冷たいものが駆け巡る。

この人、何者？

なんで居るのか。

いつの間に現れたのか。

怖い。

正体不明、もしかしたら誘拐とかなのかもしねれない。

「…………あの、貴方、何者ですか」
やや距離を取る。

たとえナイフを出されても大丈夫な様に。いつでも逃げられる様に心の準備をして。

「此處で働いてる者だけど？」

「う、嘘です。

だって、こんなボロ屋敷に人が働いてるわけないじゃないですか」

「言ひね

女的人はにっこりと笑う。

「君にはこれが『ボロ屋敷』に見えたみたいだけど、違うよ。此処は正真正銘、今も尚経営している旅館の老舗。

正式名称、『空澄館』」

読み方を何気に訂正される。

「君のお母さんから話は聞いてるよ。住み込みでしょ？ むしろ奉公かな」

「…………本当ですか？」

言つてはいることなどとん怪しげが、嘘を言つてはいる様子は無い。信じようか、信じまいか。

「うん、本当。

嘘なんて言わないからね、私は」

尚もにつこり。

これが嘘を言つ人の顔だろうか。

「ほら、案内するよ。

君の、今日から住むところに

そう言うと女的人は少女を門に向かせる。

「え、でもこれはただのボロ屋敷で」

「そう見えるだけだから。

入ればよく分かるよ」

にこにこと微笑みながら両肩を掴み、押した。
その押す勢いは「」の細い腕から出されているものとは到底思えない
ほど強い。

つい転んでしまいそうだ。

押されるままに、少女は屋敷の門をくぐった。

プロローグ、見た目ボロ屋敷（後書き）

「んにあはいんばんはおはよい」やることます、そしてはじめまして。
雪乃丞と申す者です。
初めての此処での投稿なのでかなりぞきぞきします。
一応ギャグのつもり。
なにぶん初心者ですので、ご容赦のほどをお願いいたします。
ではでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1399j/>

狐の旅館、奉公記

2010年10月21日22時47分発行